

扉の彼方へ

岡本かの子

青空文庫

結婚式の夜、茶の間で良人は私が堅くなつてやつと焙いれてあげた番茶をおいしそうに一口飲んでから、茶碗を膝に置いて云いました。

「これから、あなたとは永らく一つ家の棟むねの下に住んで貰わなければならん。遠慮はなるべく早く切り上げるようになさるがいい」

私は良人にこう云われると、持ち前の子供らしさが出てつい小さな欠伸あくびを一つ出して仕舞いました。良人はそれを見るとやや噎かれたような中年男の声に、いたわりの甘味をふくめて、「ははあ」と軽く笑つて云うのでした。

「一日中人中で式や挨拶やで嘸窮さび屈疲うれがしたでしょう。今夜はゆつくり寝みなさるがいい。廻り椽の角の日本座敷、あすこはこの先ともずっとあなたの部屋になるところだから、どうにでも気儘きままにして寛くつろいで下さい」

私はどぎまぎして良人のいうことの意味はよく酌くみ取れませんでした。良人の気性を充分に知っている私は、夫のそのいたわりを全部善意にうけ取ることが出来ました。私は小学生が復習の日課を許して貰ったように、お叩頭しげをして、つい、

「有難うございます」と云つて仕舞いました。

そして「おやすみなさいまし」と元氣よく云つて立ち上り、良人が呼んで呉れた老女に導かれて部屋へ退こうとしました。その時良人はちよつと手を上げて私を呼び止め、微笑しながら云いました。

「あなたを大切にして上げる気持ち、判つてるでしょうね」

私は、さきにも云いました通り、夫の言葉を全部善意に解して、何を誤解などしようかと、その時も何の氣も付かずにいましたが、なるほどあとで考えれば、相手に嫌われてるのではないかと、まだ相手は心に打ち解けられないものを持つているのではあるまいかなど、随分疑つてもよい、良人の仕打ちでないことはありませんのです。私がずっと年下の後添のちぞいの妻であるだけに、それが一層あつてよい筈でした。

ここでちよつと、私と只今の良人との結婚の事情を説明して、お話しますが、良人はもと私の父に使われていたある種の科学研究所の助手で、父と何か意見の衝突があつて、学問は思いとどまり、自分で事業を經營して見たがうまく行かず、一度外国へ立退いて帰つてから一ひとかど廉プラン・メーカーの事業企劃家になつたのだそうです。良人は四十も過ぎてゐるし、私はやつと二十二の春を迎えた許ばかりですし、誰が見ても順当に運んだ新郎新婦とは受取りますまい。良人が父の助手時代は、私はまったくこどもで、良人の動静については殆ど知りませず、

年頃になつてから、正月と盆にだけ私の実家へ挨拶に来る紳士があつて、それが今の良人であつたのですが、ただ普通に義理堅い父の旧弟子の一人と思つていただけです。その時分はもう父はなくなつていましたから、良人は座敷へ上りはするが、母に会つてお土産の品を出し、簡単な世間話や、時候の挨拶位で、帰つて行きました。

たまたま私が居合せると、女中に代つてお茶を運ばせられることぐらひはあり、その時良人は私に向つて、愛想に西洋の娘さんの話などしたり、ある時はまた父の在世中の逸話など二三して、「お亡くなりになつてから、やつぱり先生は偉い方だったと想い出されま

す」と母と私に向つて、等分に云つたりしたのを覚えています。

その人は骨組ががっしりして大柄な櫛かしの木造りの扉ドアのような感じのする男で、橙だいだい色がかったチヨコレート色の洋服が、日本人にしては珍らしく似合うという柄の人でした。豊かな顎あごを内へ引いて髭ひげはなく、鼻の根の両脇に瞳を正しく揃そろえ、ごく僅か上眼使いに相手を正視するという態度でした。左の手はしよつちゆう洋袴ずぼんのポケットへ入れていましたが、胸のハンカチを取出すとき、案外白い大きい手の無名指くすりゆびにエンゲージリングの黄ろい細金

がきらりと光つたのを覚えています。

その人が帰つたあと、私は母に何気なく

「あの方、結婚してなさるの」と訊きますと、母は「してなさるが、どうも奥さんと面白くない噂でね」と云いました。

私はそのとき、青年の珪次との恋に夢中になっていましたから、こんな壮年の妻帯者に興味どころではなく、全く没交渉の感じしか持っていませんでした。珪次はそのとき私と同じ年の二十一で、みずみずした青年でした。官立大学で経済を学んでいたために、父亡き後の母は、この遠縁に当って足繁く自家へ出入する青年を、何かと相談相手にして、いわば私との恋仲も黙許よりも、寧ろ奨励する形で、結婚にまで熟するのは容易な道行でありました。それが妨げられたのはたった一つの事件のためであります。

私の母は気性の派手な、負けず嫌いな、その癪締め括りのない、学者の妻というよりは、まあ事業家の妻にした方が適任と思われる性質の女でした。私の家には私の外ほかに、弟妹四人あって、男二人は父親似の学者肌ですから、いつ独立して生活費の採れる見込みか判らないし、妹二人も母の性質にすれば、身分以上の仕度をしてよい家へ嫁入らせたかったのでしょう。どっちみちお金が欲しいところです。それで父親が遺して行った多少の動産を、珪次と相談して郷里の銀行へ出資したのだそうです。私はその方面に暗い女のことですか

らよくも判りませんが、その銀行は組織は無責任の代りに出資者の利益は多い筈なのだそうです。

それが見込み違いとなつて、銀行はあやしくなり出して仕舞つたものですから、母は珪次を憎み出しました。

「あんな無責任な男はない」

珪次にいわせると「そうせっかち性急に利益を挙げようたつて無理だ」

とにかく、私の行く手は遮さえぎられました。私は母に内密でそつと珪次に相談すると、「関かまわないから、家を出てしまひ給え。二人とも命がけならどんな事だつて出来る」

こう云つた珪次と二人で思い切つて借りて住んだアパートの生活も、始めは面白く行きましたが、すぐ珪次は飽きて来ました。

「やつぱり幸福には金は附きものだな。何とかして来よう」

明るく気が利いて美貌の青年はこの知合いへ行つても、おいしいものやお酒にはありつけません。しかし、お金を貸して呉れるほどの親身な知合いはありません。

夜おそくドアを叩いて、ほろ酔い機嫌をわざと渋い表情で押えながら、

「きようは留守の家ばかりにぶつかつてね。あしたはきつと何とかなるよ」

それから世間で聞いて来た面白い話や、とても景気のいい私たちの未来の空想話をして、床に入ると思うと、いい気持ちそうに直ぐすにいびきにかきました。

それも度々では私に間が悪くなつたと見え、三日目に一夜、二日目に一夜、友達の下宿へ泊つて帰らぬようになりました。そのころのことです。ふと新聞の社会面で、今の良人の及川の妻が他の男と心中をした記事が出ているのを見つけましたのは。私はそのとき母がいつぞや「及川さん夫婦はうまく行かない」と云つた噂は本当であり、そうまで妻にさせた及川にどんな事情があるにせよ、やっぱり酷い男なのではないかと思いはしたが、そのときの私には人の身の上を深く批判している余裕もなく、一途いちずに感情的な気持ちになつて、それが自分達の身の上うへにふりかかつているせつなさなさと入り交つて仕舞いました。珪次だとして、自分を嫌つてつれなくするのでなく、つまりは仕方なくなつてこうもしているのだということが判っているものですから、ふと及川の妻の行為を知つてから、それに示唆されるような具合あはれいに、むしろあしたでも帰つて来たら、最初家出のときの覚悟の実行を珪次に勧めてみようかと思ひ定めて寝ました。

そして、あくる朝、再びその新聞を見ると、八百屋が買物の蒔こんにやく蒔やくを包んで呉れた古新聞で、日附は一年半ほども前の出来事です。私は何だか気が脱けてしまつて、なんだと

思っているところへ、ひよっこり帰って来た珪次の顔を見ると、生れつき何の屈托も取付けそうにない爽さわやかな青年なのを、私ゆえのために、こうもしょんぼりさせているのかと思うと、いじらしいような楽しみのような気持ちが起りまして、

「こらっ、いけずやさん、なぜ帰ったの」と笑いながら責めてやりました。すると珪次は案外に立ち勝った私の迎え方に有頂天になって、私の肩を抱えて、「御免、ね」と子供のようあやまに謝りました。私は何とも知れぬ涙がはらはらと零こぼれて、花のようなこの青年を決して私のために散らすまい。もし、そういう羽目にもなれば、自分一人だけの所決にしようと決心しました。

その日は私の持ちものの最後を洗い浚すげい持たせてやって、金に代えさせ、珪次を存分に御馳走してやりました。

また二日ばかり経った珪次の留守の日のこと、私は小さい土鍋で、残った蒟蒻をくつつ煮ていました。一寸書ちよつとき添そえたいのですが、私はどういものか子供の時から、あの捉えどころのないような味と風ふうてい体ていで人を焦しらすような蒟蒻が好物でした。私は鉛おんのような憂鬱うゑいに閉とざされて、湯玉で蒟蒻の切れの躍うるのが、土鍋の中から嘲あざわら笑わらうように感じら

れるので、吹き上げるのも構わず、蓋ふたでぐつと圧おさえています。何も食べるものの無くなつた今、蒟蒻は貴重な糧食であるばかりでなく、私はどうせ餓死するなら蒟蒻ばかり食べて死のうと、こないこじな気持ちを募らせていました。丁度その時です。

「お嬢さん、クツキングですか」

普通の人の背では届かぬアパートの部屋の窓の硝子戸ガラスの隙から、帽子の下の及川の正しく並んだ眼のぞが覗いていました。顔は痩せて蒼黒く見えました。私は思わず部屋着の胸を掻き合せました。

「私も人生の失敗者です。その失敗者が同じ失敗者のあなたをお迎えに来るなんて妙なわけですが、おかあさまがお気の毒なので、お頼みをそのまま引受けてお迎えに参りました。場合によっては、自分のことは棚に上げて、ご意見でも何でも申しますよ」

二人が部屋に向き合つてからの及川の言葉でありました。

及川は寂しそうに笑いました。私はその男の寂しい笑顔を見ると、自分と珪次があんなに突き詰めて情熱を籠めて行動して来た生活が、まるで浮いた戯たわむれのように顧たられませんでした。何と抗さうてみても体験で固めたこの厚い扉のように堅く寂しい男の笑顔に対しては、爪も

立たないように思われました。私をある悲惨な決意にさえ導きそうな現在の憂鬱さえ、彼の前にはまだ甘いものに感じられました。しかし、彼に黙って迎え取られて行く前に、たった一つ訊いてみなければならぬことがある。私はちよつと口籠りながら、しかし勇氣を起して訊ねました。

「あの、あなたの奥さまの悲劇はどういうことから起りましたの」

すると、及川はぐつと口を結んだが、額のひたい小鬢こびんには興奮の血管が太く二三筋現れました。けれどやがてその興奮をも強く圧えてから云った。

「つまり、私があんまり完全無欠に女を愛し切ろうとしたためです。あの種の女に取ってはそういう男の熱情がただ圧制とばかり感じられて、死にもの狂いの反抗心を起させると見えます。こんなことを人に話しても判つて貰えないかも知れませんが……」

及川は顔を悪魔のように皺しわめて、

「やつぱり女には一部分それとなく気ままな自由を残して置いてやらなければ息がつけないと思えますね」

悔いと怒りを堪えるために却つて無表情に帰した中年男の逞ましい意旨だけが、大きく瞳いた眼と、膨れた鼻孔とに読めました。

「私も前半生に於て痛切な勉強をしたものです」と彼は小さく声を低めて云いました。私はむくりと骨から剥がれた肉の痛みのようなものを心に感じて、今居ない珪次が可愛相でなくなりました。その痛みは珪次から離れて、この中年の男に牽かれ始めた私の魂の剥離作用に伴う痛みではなかったでしょうか。

母の家政のやり方をただ虚栄で我儘と見た旧弟子達は、だんだん寄りつかなくなっていました。一人だけ昔と変りない及川に、母は娘の私を頼むより仕方がなかったのです。私の少しばかりの身の廻り品を纏めて小風呂敷包みにして、それを抱えおじさんのように私に附添って母のところへ送り返した及川は、ごくあつさり

「お嬢さまは私が行った時、蒟蒻を煮ておいでになりました」

と報告しました。私に武者振りについても、飽くまで詰責しようと思っていた母も、これですっかり気先を挫かれて、苦笑するより仕方ありませんでした。そのあと母は泣き出して、おろおろ声で及川に頼むのでした。

「今後はこの子をあなたがいつまでも面倒見てやって下さい。私の手には余りません」とすると及川は案外気さくに引受けて

「は、承知いたしました」

及川はどういう意味に母の頼みを引受けるつもりか。そう云ってからからと笑いました。それから、眼を深く瞑り腕組をして、

「さあ、こういう時に、歿なくなられた先生の批判うかがが伺い度いものです。及川、貴様は科学者にしては冷静を欠くと、よく先生に叱られたものですが……」

良人の話によると、珪次は、良人が私との離別を云い出すと、激しく怒ったり泣いたりして、自殺するとまで云ったとのことでありす。

「そこで安心して帰って来ました」と良人は云いました。私はあわてて

「それがどうして安心なのでございます」

と訊いた。良人は

「あの時、珪次君がじーツと眼を据えて、唇を噛み、顔が鉛色にでもなるようだったら、監視も要し兼ねないでしょうが、ああいう風に即座にタップのステップでも踏んでしまうように興奮して仕舞えば、総すべてが発散して、却ってあとには残らんでしょう」

「どうしてそんなことを……」

「僕は自分で苦しんだ体験に無いことは、自分で信じもせず、また人にも云えぬようにな

っていますね」

私はこの人は恐ろしい男である。ひよつとすると、この力で巧んで私を珪次から奪い取ったのではあるまいかと、脅迫観念にさえ襲われました。しかし、仮りに奪われて来たにしろ、その力は讃嘆すべき程頼母たのもしかつた。こうして私はやがてこの人と結婚式を挙げました。

「どうだね、ここは」

良人は浴室で一風呂浴びて来た血色のいい肌へ浴衣ゆかたに丹前を重ねたものを不器用に着て縁に立ちました。硝子戸ガラス越の早春の朝の陽差しを眩まぶしい眼ざしで防ぎながら海を眺めていました。

結婚後一ヶ月目の年の暮から、私をこの海岸の旅館に寄越して置いて、自分は年始廻りやら、正月の交際を済まして五日の日に宿へ来た彼は、割合に荷嵩にがさな手荷物やらゴルフの道具やらを持ち込んだ。私は宿の女中に手伝って貰って、一先ずそれ等を部屋の中に適当に処置するために働いていました。

「気に入りましたわ。平凡なところが」

私はこんな返事をしながら、良人があまりに胸高に締め過ぎた帯を後からそつと掴み下げてやるほど、形だけは遠慮がとれた妻になっていました。良人はちよつと私を振り返つて、自分でも帯の前の方をずり下げながら、

「平凡かね。なるほど……いや、気に入らなければどこへでも移つてあげるよ」

と云つて、女中に座敷の中の煙草を取らして、その籐椅子で、煙をふかし始めました。「ほんとに皮肉でも何でもなく、平凡なところが結構でございますのよ」

その平凡なところを結構とする私のところはこうでありました。若し、秀拔な山のたたずまいや、雄渾な波濤の海を眺めやつたなら、それを讚嘆する心の興奮に伴つて、さすがに埋め尽した積りの珪次との初恋の埋火が、私の心に掻き起されないものでもないよ。うな気がしてならなかつたのであります。実際この浜には乾いた枯蘆しかなく、水は遠浅の内海ですが、しかし沖のかたに潮満ち寄せる日中の白帆の群が介殻を立て並べたように鋭く閃めき、潮先の泡に向つて飜り落ちてはまた煽ぎ上る鷗の光つて入乱れる影が、ふと眼に入ると、どういふものか私は堪らなくなりました。水はしずしずと渚に寄せて青く膨れ上る。悠久な天地は悠久なままで、しかも人を置き去りにして過ぎ去つて行く。人はどんどん取り残される。淋しいことだ。その時私は珪次も良人も要らない。ただ初恋の

あの情熱だけを、いま一度取り戻したい。いのちにかけても、そう思いながら自分で自分の胸を抱いて座敷に立ったまま、嗚咽おえつの声を堪え兼ねるのでありました。

夜になって闇の沖にいさり火の見えるのも苦しかった。見果てぬ夢をあまり短くして断つたそれを惜しませるような、冷たく擲揄やゆするような沖の篝火かがりびでありました。灯は人の眼のように瞬またたくだけなお悪つたのです。私は早く月の夜になればいいと希ねがいました。月の夜になるとこの辺ではいさり火を焚く舟は出さないのです。

私はふと気がついて自分の冥想をまぎらすように、

「ばあやどうしています」と良人に訊きました。それと良人が海を眺めていた顔を室内へ振り向けて、

「この宿の食事はどうかね」という言葉とがかち合いました。良人も実は何か考えていたのを紛らすためにいった言葉らしい声音でした。

二人はただ微笑して、強いて返事を訊く必要もないお互の問いであることを、暗黙に示し合いました。そして暫くの間、浜辺に近い遠浅の春のようにあたたかい陽がのろりのろり淀んだ海面に練られている穏かな平凡の中に、万事を忘れるようにしました。岬をめぐるって来る汽船の汽笛の音が聞えました。

「ほんとにこんなに永く滞在していて、あなたのお仕事はよいのですか」と私は良人に訊きました。正月も二十日過ぎです。

「僕はある点無茶な男でね。これが一番人生で、値打ちがあると信じたことに向つては、万事を放擲ほうてきして目的に取り組む。普段は随分打算家で、世間師の僕だがね。こここのころを君のお父さまは冷静を欠くと叱りなすつたし、僕の前の……」と云いかけたが、ぐつと声を太めて、「僕の前の妻は压制な暴君のように誤解して仕舞つたのだ」

ここで良人は一寸私の顔を見て、

「しかし、僕はこれが身上なのだ。これを取り去られては僕というものがない。だんだん判つて来たでしょうが、あまり気にしないで呉れ給え」

私は良人が私をうち見守る眼差の中で、結婚して始めての嬌態を作つて、こう云わないでは居られませんでした。

「値打ちのある目的つて、どんな目的をお持ちなのよ」

すると良人は、逞ましい腕を伸ばして私を自分の胸に押しつけました。

「僕のこの頑固な胸を君に開いて貰いたいのだ」

ああ、それは実に開くに骨の折れる重たい檜ドクの木ノの扉である。そしてその扉は良人の胸

にばかりあるのかと思いの外、私の胸にもそれがあるのです。一ばん困ることは、その扉を開けかけるとその隙間から、まず、結婚前のお互の想い出の辛い悲しい侏儒しゅじゆがちろちろと魂に忍び込むことでした。良人にとつては前の妻であろうが、私にとつては珪次の想い出なのです。今頃、珪次はおとなく再び学校通いを始めていて呉れているだろうか――。良人は一たん私を静かに胸から離して云いました。

「二人ともこれで実はさうとう深傷ふかでを負つてるのだなあ」

私は生れて以来こんな悲壮な男らしい声を聞いたことがありません。逞ましい雄獅子が自分と妻の致命的な傷口を嘗めな労わりいたつつ呻うめく、絶体絶命の呻きです。私の身体はぶるぶると慄えました。ここまで苦しんだなら、いくら厚い仕切りでも消える筈だ。私の心はくると全体の向きを変えました。二人をこの上とも苦しめようとするのは何者だろう。

それは想い出だ。青春への未練だ。私はこの男にそれから逃れさすために、自分も潔いさぎよくそれを捨てよう。私は女と生れた甲斐には氣丈になつて、この男を更生さしてやらなければならぬ。私は今度は進んで自分から良人の胸へ額を持って行きました。

「私も大人になりますから、あなたも過去のことは打切つてね。それからもう明日にも東京へ帰ることにして、すこしうちの事務の相談でもしましょうよ」

結婚式は挙げて、二人の心境がほんとうに茲^{ここ}まで進まなければ、事実上の良人と妻になつてはならない——こう良人は潔い遠慮をし、私も自然にそれに従つていたのが、式後一ヶ月以上の礼儀正しい二人の生活内容であつたのです。

藪蔭に早咲きの梅の匂う浜田圃の畦^{あぜ}を散歩しながら、私は良人が延ばしていた前の妻の墓標を建てることや、珪次の学費の補助のことや、感傷や遠慮を抜いた実質的な相談をしました。蒼溟として暮れかかる松林の上の空に新月が磨ぎ出された。一々私の相談を聞き取つて確実な返事をしたのちに良人は和^{なご}やかな気持ちになつたらしい声で微笑しながら、「この先の八幡が君の好物の蒟^{こん}蒟^{やく}玉の名産地だそうだよ。今晚の夕飯に宿へ取寄せて貰つて沢山食べ給えよ」

青空文庫情報

底本：「岡本かの子全集」ちくま文庫、筑摩書房

1993（平成5）年7月22日第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集」冬樹社

1974（昭和49）年3月～1978（昭和53）年3月

初出：「新女苑」

1938（昭和13）年2月号

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2010年3月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

扉の彼方へ

岡本かの子

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>